

ちりめん三尺ばらりと散って

俳優金子正次 33歳の光芒

文藝春秋



生江有二

ちりめん三尺 ちらりと散

俳優金子正次 33歳の光芒

生江有二

文藝春秋

〔著者紹介〕

1947（昭和22）年9月福島県会津生まれ。明治学院大学法学部中退。女性誌の取材記者を経て74年、フリーに。男性週刊誌、スポニチ等でルポ活動を展開。82年『無冠の疾走者たち』で第9回日本ノンフィクション賞受賞。主な作品に『つっぱりトミーの死』『ガダルカナルの地図』など。

ちりめん三尺
ぱらりと散って

——俳優金子正次 33歳の光芒——

一九八七年四月一日 第一刷

定価 一、一〇〇円

著者 生江 有二なま え ゆう じ

発行者 西 永 達 夫にし えい たつ ぶ

発行所 株式会社 文藝春秋

〒二〇二 東京都千代田区紀尾井町三—二三

電話 〇三（二六五）一一一一

印刷 凸版印刷

製本 中島製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

(一)	狼	5
(二)	撮入	16
(三)	津和地	25
(四)	新宿	47
(五)	別離	74
(六)	半端者	93
(七)	優作	107
(八)	混乱	127
(九)	売り込み	156
(一〇)	湯布院	180
(一一)	公開	205
	あとがき	232

ちりめん三尺ぱらりと散って

——俳優金子正次 33歳の光芒——

装幀 上條喬久

(一) 狼

銀座・数寄屋橋交差点。スクランブル式の信号下に立つと、常駐している右翼街宣車のはるか後方、古びたビルの屋上に、かすかに三角マークと認められる旗が、ゆったりとひらめいているのを眺めることができる。

東映本社。

九階建てではあるが、有楽町フードセンターの向こう、日が落ちて薄墨色をした空にそそり立つ有楽町マリオンとは比ぶべくもないビルである。

邦画宣伝部は七階にあった。

「おおい、ねえ、ねえ、キンちゃん。あんた、東映^{こく}の生き字引きなんだからさ。ちょっと説明してやってよ」

砕け散る波濤とともに銀幕の中央から飛びだしてくる東映の三角マーク。このロゴの由来を聞くために、ベテラン社員のいそうな宣伝部をたずねると、椅子にふんぞり返っていた肥満体の中年部員が、棚を隔てた隣りの洋画宣伝部に声をかけた。

「おれもよくわかんねえんだけどき。東映は三つだかの会社が集まってできたんだろ」

キンちゃんと呼ばれた社員は、白髪をかきあげながら、肥満体の宣伝部員と話し始めた。

一九三八年（昭和十三年）六月。東京横浜電鉄（現東京急行電鉄）の肝煎りで、資本金三十万円の東横映画設立。撮影はもっぱら、太秦にある大映京都第二撮影所で行なわれた。一九四九年（昭和二十四年）、この太秦撮影所と東横映画に、戦後すぐに完成した東京・大泉スタジオが資本参加という形で設立したのが東京映画配信KK。

「だから、あの頃の東映のトレードマークはTYKという三つの英字をデザインさせたものだった。今のロゴになったのは、大川博が社長に就任してからのものだと思うよ。二つの撮影所と前身の東横映画で三角だっていうんだ」

一九五一年（昭和二十六年）、低迷を続けていた東京映画配信に、東急から大川博がやってきた。社名も東映株式会社と改まった。片岡千恵蔵、市川右太衛門らを抱えた新生東映は、この年二十六本を制作。やがて時代劇を中心に次々とヒット作品を生み、映画の黄金時代を担う一翼となっていく。

「だけどき、三つの会社が一緒になって三角だなんて、あとで誰かがこじつけたんじゃないの。」

あまりにでき過ぎだよ」

なんせ、映画屋の言うことだからね。あんまり信用しないほうがいいよ——『極道の妻たち』(監督五社英雄)の大きなポスターが貼られた部内に、活動屋らしい笑いが広がっていった。

東映は長い間、時代劇で映画ファンを沸き立たせ、やがて任侠映画に主流は変わり、七〇年以降は実録路線へと突入していく。

手持ちカメラによるリアルなカメラワーク。血しぶく激闘。功名心。裏切り。こうした生々しい男たちの闘いを見ようと席についた途端、銀幕に浮かびあがる東映の三角マーク。それだけで多くのファンは躍りあがる興奮を抑えるのに苦労した。金子正次も東映のトレードマークに心をふるわせたひとりであり、やがて三角マークをその手でつかむことになる。

宣伝部と同じ階。ビデオ事業部と書かれた部屋の前を通り、曲がりくねった細い廊下をしばらく行くと、第一試写室に突き当たる。

席数七十。試写の行なわれていない室内は真っ暗である。その暗い席に座ってみた。

映画『竜二』が公開される一か月ほど前だった。徹夜明けのふやけた顔で銀座を歩いていると、映画関係者と呼ばれとめられた。寝る前に試写を見ろと言う。

「なに、つまらなかったら眠ってればいいんだ」

満員の試写だったと記憶している。見知らぬ監督。新人にしては年齢を食い過ぎている主演者。助演も三、四人を除き、見たことのない者ばかりである。フレームの周囲から低予算の撮影であ

ったことが滲み出ている。だが、背中には慄然とした感動が走り始めていた。

正次は試写があると、必ず会場に向いていたという。しかし、終映後、新鮮な衝撃に洗われて試写室を出てきた、その当時の記憶の中に正次の姿はない。再び金子正次の名前と出会ったのは新聞記事の中だった。

デビュー直後の死——80年代のヤクザ映画——として、若い世代にいま圧倒的な支持を受けている映画「竜二」に主演してデビューしたばかりの俳優、金子正次さんが六日午前三時三十五分脾臓がんのため東京世田谷区奥沢の板谷クリニックで急死した。三十三歳だった。告別式は八日正午から渋谷区本町五の三一の五の大善寺で。喪主は妻朋子さん。

「竜二」初日の十月二十九日、新宿東映ホールで舞台あいさつをしたあと頭痛を訴えて救急車で入院した。この作品はアゴ&キンゾーの佐藤金造、金子さんが演じた竜二の女房役に永島暎子ら起用しての自主製作で、今春三か月がかりで撮影された。川島透監督も新人で、脚本は金子さんが鈴木明夫のペンネームで書き上げたもの。東映系での公開が決まった夏以降、入院していたが、すでにがんが全身に転移していたようだ。

十年前にアングラ演劇で俳優としてスタートしたが、三年前に胃がんの手術をして休養。あらためて映画界に第一歩を踏み出した。

新宿を舞台にヤクザの世界と市民生活を往来する竜二は、すごみをきかすチンピラが職業であ

るかのように振る舞う若い男で、任侠映画がブームを呼んだ時代と違った現代のヤクザを描いたユニークさが高く評価されていた。金子さんはその好演で今年の新人賞の有力候補とみられ、出演依頼も殺到していた。(中略)そのはなやかなデビューから一週間目に、俳優・松田優作、劇作家・内田栄一氏ら仲間や家族にみとられながら、惜しくも他界した。愛媛県出身。「竜二」に子役で出演した五歳の一女がいる。(一九八三年十一月六日付 毎日新聞夕刊)

全六十一行。顔写真つき二段見出し。正次の訃報は各紙に流れたが、毎日新聞に載った死亡記事は、新人俳優の死を報じるにしては異例とも思える長いものだった。同紙に問い合わせると、この記事を書いたのは学芸部記者松島利行だと教えてくれた。松島利行は海外取材から帰ったばかりの多忙な時期だったが、連絡を入れると落ち合う先を、日本棋院会館の記者室と指定してき

た。

国鉄市ヶ谷駅いちがやから近い棋院会館の五階。スチールの机ばかりが目立つ殺風景な記者室だが、広い窓一杯に市ヶ谷周辺の夜景が望める。ネオンのまばらな外堀通り方向から、ひっきりなしにサイレンが聞こえてきた。市ヶ谷駅に急ぐコート姿の人々。

一九八五年、歳の暮れとし。ざわつく窓の外と対比的に、記者室はがらんとしている。同館内でたかわれている本因坊リーグ戦の対戦取材に、各紙の記者は出払っているのだらう。部屋の隅に置かれたTVモニターでは小林名人対杉内九段の対戦模様が、音量を絞ったまま流れていた。再

び、会館の真下をサイレンが行く。対戦中の棋士にとって、神経を苛立たせる音に違いない。

小林名人の旗色が素人目にも悪いと思える展開を、TVモニターが映しだし始めた時、記者室のドアがあいた。ごま塩頭。温厚な顔。松島利行だった。

「入社して三年目にね、囲碁の担当に欠員がでた。それまでぼくは整理部（校閲）にいたけど、部署など、どこでもいいから現場に出たくてうずうずしていた頃でね。欠員が出たと聞き、すぐに手を挙げた。ですから映画より囲碁との関わりのほうが長いんですよ」

松島が囲碁記者を兼ねながら、映評欄を担当するようになるのは一九七七年のことである。

「あれは七三年の頃だった。内田栄一（劇作家）の主宰していた演劇集団クスボリ共同隊で分裂騒ぎがあったね——いや、クスボリ共同隊という劇団名でなかったかも知れない。いくつもの名称を使って内田栄一は演劇活動を行っていたからね。ぼくはまだ映画の担当ではなかったが、芝居の関係者とは、よく会ったりしていた。その分裂の中で、理由はともかく、『反内田派』にぼくは肩入れしたんです」

七〇年以降の倦んだような政治状況を反映して、小劇場運動も解体と再生の連続だった。公演の際には他劇団の『襲撃』を予想して、舞台の袖に角材が用意され、殴り合いが幕間劇として行なわれるような時代だった。反天皇劇というラディカルな演劇展開を、続けざまに打ってきたクスボリ共同隊の分裂も、劇団構成員の中に激しい確執をもたらしただけである。

「分裂騒ぎのちょっと前に、内田栄一から金子正次を紹介されていたと思う。その後、分裂が決

定的になった頃だった。偶然、新宿の飲み屋街で金子君と通りがかりに会ったんです。彼は演劇青年というより、眼の血走った兇悪なツラ構えをした狼のような感じでしたね。もっとも、あの頃は大島渚^{なぐさ}だって誰だって、笑い顔など見せない。みんながみんな、狼でしたよ」

金子正次が松島を呼び止めた。軽い挨拶でも交^かわすだけかと思ったが、サングラスを外^{はず}した正次の眼は笑っていなかった。

「すでに一、二回、彼は内田栄一と一緒に芝居を打っていたはずですよ。それで、松島さん、今度、西田を見つけたら——西田佳一といって、『反内田派』のリーダー格ですが、西田を見つけたらおれ、必ず殴りますからと言う。いや、こんな軽い言葉じゃなかったな。実際にはもっとドスのきいたセリフだった。そう話すと、金子君はくわえていたタバコをいきなり自分の左手の甲に押しつけて、揉み消したんです。ぼくが『反内田派』のメンバーと親しいため、彼なりの方法でばくを脅したんでしょうね。それから十年間、彼とは会うこともなかった」

松島の学芸部デスクに突然、金子正次から連絡が入ったのは一九八三年九月のことだ。

『竜二』の完成と試写の知らせを聞き、松島はこの『タバコ揉み消し事件』をとっさに思いだしたという。

「あの時のことを憶^{おも}えているかとたずねると、映画の中でも使っていると笑っていた。でも正直言って、映画にはまったく期待していなかった。『竜二』は自主映画ですが、自主映画の中には意欲的ではあっても、実験映画の領域を出ないものが多い。条件の悪さや金銭的制約からくる破

綻があらさまに見えてしまう例が少なくないですね。まして客三人などという芝居をやっていた内田栄一の傘下にいた男です。また、わけのわからない映画を撮ったんじゃないかと、試写室に向かう足どりは重かった」

のちに松島利行は自主映画『竜二』の紹介と、新人俳優金子正次の登場を、二度にわたり学芸欄で記事にしている。ヤクザさえ職業になる現代社会、任侠道とはほど遠いヤクザの日常生活とその哀歓を描いた『竜二』を見て、餓狼のような金子正次しか知らぬ松島は、感動より先に驚きをもってスクリーンに見入ったことだろう。

「危篤の連絡が入り、病院に駆けつけると、彼の意識はもうなかった。夜の一時過ぎまで病院にいたが、ほかに一般紙の記者は誰も来ていない。そうになると、金子正次の死というスクープを取るために、彼の死を待てるような気がして、それがいやでばくは最後を看取らず、帰ってしまった。帰宅直後、内田栄一から金子臨終の知らせが届いたんです」

松島はこの内田栄一からの訃報を、金子正次の死亡時刻として記している。病院の発表した時刻とは若干ずれているが、敢えて書き直さなかった。

「確かに金子正次の知名度からいくと、長い死亡記事だったかも知れない。でも、知られていない者の死だからこそ、詳しく書くべきなんです。鮮烈なデビューを果たした俳優が作品一本だけを遺して逝ってしまった。その事実だけでも伝えようと思ったのが、あの死亡記事です。以前から知っていたからということを書いてたわけじゃないし、ただ知っているだけでは書けるもんじ

やないですよ」

金子正次が顔色ひとつ変えずに、タバコを揉み消した手の甲を、松島利行は今でもよく憶えている。それが「男」の証しとでも思っていたのか、浅黒い手の甲には、いくつもの火傷跡があったという。

ワルを弄もてあそぶ少年たちが度胸試しにやる、こんなアソビさえ、正次は真剣に演じた。誰が見ても「子供じみている」のだ。だが「子供じみ」た金子正次が、十年後に映画を一本作ってしまった。松島利行は「学生芝居的な素人くささのまったくない、きちんとした仕上がり。ヤクザだけでなく、一般社会にも普遍化できるテーマを芯に持った佳作」と『竜二』を評価する。今にも張り裂けそうな危うさをもつ正次を知っていただけに、『竜二』を観た松島の心は、人一倍躍ったに違いない。六十一行という長い死亡記事は、十年を経て濃い鈍色にびいろの毛並みを見せ始めた狼、金子正次の突然の死に対する無念を、松島なりに表わしたものだっただろう。

「待ってろよ——」

これが金子正次の口癖だったと、ある古い友人は語る。深夜の街。手を振り、合図をしても、タクシーは容易につかまらない。客を一瞥して走り去るタクシーの尾灯テールを睨みながら、正次は誰に言うともなく呟つぶやいたという。

「待ってろよ——」

この口癖は、のちに正次が率いた劇団で、公演タイトルとして使われている。夜風に流れる白息にのせて呟いた言葉は、自分に言い聞かせるためのものだったのか。それとも、くやしさを呑みこむための精一杯の粹（いき）がりだったのか。立てたコートの襟（えり）から、なおもかすかに白い息は流れ続けた。

「待ってろよ。今にな……待ってろよ。今に男になって、てめえら、おれが通りに立つだけで、喜んで寄ってくる男になるからよ。それまでお前ら……待ってろよ」

男になる。この少々うんざりするような、言い足りてない言葉を、正次は三十路（みそじ）を過ぎてからもよく口にしていた。肥大する消費生活の中に、競（きそ）って安住を求めようとする風潮の時代にあつて、「男になる」という大時代的な刃（やいば）を握（にぎ）って斬りこんでいった者の軌跡は、我々に戸惑いをおこさせるほどに眩（くら）しい。しかし、瀬戸（せと）の島で育ち、街を駆け抜け、夜の世界にうしろ髪ひかれながらも、銀幕に飛びこんでいった男は、安定という枠の中から一步も踏みだそうとしない凡百の戸惑いなど、歯牙（しが）にもかけず、今もなお、光芒を曳き続けている。

〈小料理屋・店内〉

カウンターで飲んでいる三人。

ひろし 「すみません」

竜二 「いいからほら飲め」